

## 求人募集について思うこと

**求職者へ 学生へ**  
**そして募集する側の先生方へ**千里堂治療院 院長 みうら まさと  
**三浦 真人**

珍しく (?) 忙しい午後、こんな日に限って事件 (?) は起こる。

初診患者への問診の途中で電話が鳴った。他のスタッフは全員ベッドサイドで治療の真っ最中だ。

「今日は○曜だから□□さんかな、それとも久しぶりの△△さんかな。申しわけないけど夕方まで予約でいっぱいだし断るしかないか…」

そんなことを思いながら受話器を取る。

「千里堂治療院です」

すると、前置きなしに若い声が返ってきた。

「『医道の日本』を見たんですけど、まだ求人募集してますか？」

「……………」

絶句とはこのことである。

しかし、このような電話が非常に増えていることもまた現実なのだ。

このような電話のかけ方をする人は、間違いなく第一次面接(相手を思いやる電話のかけ方)で不合格となる。運良く直接会って話をする段階に至ったとしても、すでにこちらにマイナスイメージを与えたところからの面接になるので、それを挽回できる逸材でなければ採用することはない。

治療とは「人に接する」ことである。異論もあるだろうが「医療はサービス業である」こと

が広く認められてきている。そして、電話は一種の暴力になることもまた事件例などあげるまでもなく周知のことである。治療院に勤めようとする者が、相手側の都合に気を配ることもせず自分の用件だけ伝われば良いと考えていること自体が、私には信じられない。

応募の電話にはスタッフが出ることもある。その際にも、私はあとで必ず確認する。

「電話をかけてきた人は、まず名前を名乗ったか？」と。

自分の名前を名乗るのは対人関係を築く基本であるが、残念ながら名乗りもせずいきなり「給料はいくらもらえるのですか」などと「本題」(?)に踏み込む輩もいる。

これから勤務治療家として求人に応募しようとする人は、自分がやろうとしている仕事何なのか、よく考えてから受話器を持ってほしい。

**仕事は勉強？**

『医道の日本』誌の求人欄や研究会予告等を見るまでもなく、治療法は星の数ほどある。治療家の数だけ治療法は存在しているとも言えよう。国家資格所持者なら、否、たとえ学生であっても、自身がどのような環境のもとでどのような治療をしていきたいのか考えないはずはな

い。ところが、いざ就職先探しとなると、最も大切なはずのそのことをまったく考慮しない人が多い。

「勉強させてもらいたい」などと耳障りの良い言葉で応募してくる人もいる。勉強？……つまり私どもの治療院に来られる患者さんを自分の勉強材料にするつもりなのだろうか。

間違っってはならない。研修会に行くもよし、友人や家族の協力を求めるもよし、いずれにせよ「勉強」は金と時間を出してやるものだ。給料をもらいながら「勉強」とはなんたる傲慢な態度だろう。

私は日頃から「一生勉強」だと公言している。勉強とは自分でやるものだ。給料をもらいながら雇い主に何とかしてもらおうものではない。

私どもの治療院では、就職希望者は事前に施術を受けにきていただくように勧めている。どのような環境でどのような治療をしているのか分からずに、どうして就職できようか。採用する側としても、「分かってくれている人」を採用したいのは当然のことである。その上で「ここで自分を磨きたい」と思われる方の応募を期待している。

求人記事の小さな枠のなかにも、募集する先生方の苦心の跡が読み取れるはずだ。限られた字数につめられたメッセージ、行間に込められた思いまで汲み取ってみよう。きれいごとだけを羅列していないか。どのような人材を望んでいるのか。募集記事を見ればおおよその見当は付くものである。

## 「先生」と呼ばれて勘違い

以前、ある業界誌で「学生の本音を聞く」と題してアルバイト先として勤めたい治療院・勤めたくない治療院を言いたい放題にディスカッ

ションする企画があった。

そこで語られていたことに対していちいちコメントするつもりなどないが、一言、「給料をもらって働く以上、楽な仕事などない」ということは言っておきたい。

世の中にはさまざまな仕事がある。どの世界でも人は身を粉にして働いている。ハンバーガーショップをのぞいてみるとよい。宅配便のドライバーを観察してみよう。皆、汗だくになりながら仕事している。なぜ治療院の「先生」だけは楽ができると考えるのか。

思うに「先生」「先生」と呼ばれることに自分自身を見失う原因のひとつがあるかも知れない。例えば高校を卒業して専門学校に進み、学生時代から鍼灸院でアルバイトをして「先生」扱いをされる。そのまま就職したり独立したりすると、一生「先生」だ。いったい何の「先生」なのか？ まさか「全人格」ではなかろう。だが、それを勘違いする人がいる。

以前、『医道の日本』誌のインタビュー記事に、大学病院の高名な医師が患者さんをベッドから抱き起こしたりスリッパをそろえたりする話が掲載されていた。私たちは何かしらの悩みを持って来院する患者さんに、対等な人間同士の付き合いをしているだろうか。否、それどころか「よくぞ当院へ来てくださった」「お体に触れさせていただく」という感謝の気持ちを失っていないだろうか。

話題を学生アルバイトに戻し、一事にだけ触れる。そのディスカッションの中で「15分前出勤を命じられていて閉口している」と語っている学生がいた。実は私どもの治療院でも先生方に「15分前出勤」をお願いしているので、その発言には驚いた記憶がある。私どもの治療院でも、以前は何のルールもなかった。30分も早く出勤して、院内の点検や清掃をボランティアで

やってくれる先生もいれば、どこかで時計を見ながら時間をつぶしていたのではないかと疑いたくなるほど、毎日決まって出勤時刻の1分前に現れる先生もいた。学生ともなると、学業優先だから治療院が開きすでに患者さんがいらっしやる時に出勤してくる場合も多い。シフト制で勤務していただいている遅番の先生も同様だが、出勤時刻ぎりぎりに駆け込んでくる先生は当然ながら患者さんの目にも止まる。駆け込んできて数分後には白衣に着替えて患者の前に姿を現すのだ。

それで「衛生的で身心のくつろぐ治療院」を標榜しても、絵に描いた餅にしかならないのは自明である。

かつて私は、目にあまる出勤態度の先生に苦言を呈したことがあった。

「少しは余裕を持って出勤してくれないだろうか」

すると、その先生の行動が変わった！ いつも1分前出勤だったのが、翌日からは2分前になったのだ!!

このようなことがあると、勤務者同士の人間関係も悪くなっていく。普通に心配りできる人なら、どこかで周囲と足並みをそろえようとするのだが、権利意識だけで働き「人と接する」という治療家としての本務を忘れると「自分の都合」だけで行動してしまう。冒頭に紹介した電話の主もしかり。

やがて、心ある者も嫌気がさして退職するような事態が起こり、私どもの治療院でも「ガイドライン」を作るべきだというコンセンサスに至った。その結果が「15分前出勤」である。もちろん、あくまでも「お願い」に過ぎない。

くどいようだが、このようなガイドラインは存在せずにはすめばそれに越したことはない。私たちが相手にするのは荷物でもなければ機械で

もない。人間、しかも何かしらケガや病気の症状を持った悩める人を相手にするのだ。そのような立場にある者が、どのような状態で仕事に臨むべきか。前述のような学生は進むべき道を誤っているのかも知れない。

## アドバイスはたった一言

勤務治療家の友人と話していてよく耳にするのが「院長への不満」だ。「院長がスタッフの人格を尊重しない」と愚痴をこぼされることもある。しかし、陰口を叩いて憂さを晴らしても何の解決にもならないことは本人が百も承知しているのだ。このような場合の私の助言はシンプルである。

「辞めれば？」

——不満があるなら辞めればよい。

当然のことながら不満を第三者に漏らして憂さ晴らしする以前に、解決策を探して試行錯誤してきたのだろう。もしもそのような努力もなしに愚痴をこぼしているだけなのだとしたら救いようがない。だが、少なからず努力をしたうえで、それでも院長に不満があり、共有する価値観が見られないのであれば、一日も早く退職するべきである。

「まったく、うちの院長ってひどいんだ！」という言動は、自らをおとしめるものでしかないことを知るべきである。

## だからといって転職か

その一方で、次々と転職を繰り返す人もいる。1年と続かずに退職と就職を繰り返すような治療家だ。このような人は、そもそも自分がどのような環境でどのような治療をしていきたいのかという基本的なところが定まっていない証拠

である。

「勉強のためいろいろな治療院を見たい」という人もいる。しかし、前述の通り「勉強」の材料にされる患者さんはたまったものではない。

私どもの治療院でも、患者さんを放り出して転職していく先生が過去にあった。しかも、患者さんと信頼関係が築かれ、ようやく継続治療が軌道に乗って患者さんが少しずつ快方に向かい始めた時にだ。もちろん当方にも「終身雇用」などできる実力はないし、引き留めるだけの魅力もないのだろうが、それにしても無責任に退職するケースが存在する。

就職も退職と同じである。私たちは荷物や機械を相手にして仕事するのではない、生身の人間を相手にするのだ。それは究極において個人と個人の関係の上に成り立っている。たとえ院長先生であっても、あなたの代わりは務まらないということを肝に銘じて治療に当たってほしい。院長先生のためなどではない。患者さんのために、責任ある行動をしてほしい。

## 雇う側の先生へ

長々と苦言を呈してきた。最後に、雇い主側の先生方に憎越ながら一言お伝えしておきたいと思う。

前述のとおり、私ども千里堂治療院では求人応募予定者には体験的に当院で施術を受けるように勧めている。そのうえで、応募者とは2時間程度の時間をさいて面接している。ここでは、私から千里堂治療院の施術内容や考え方、経営方針やスタッフについて話し、応募者からも治療に対する考え方、千里堂治療院で何をやりたいのか、これまでの経歴についてなどを伺うようにしている。さらに採用内定に至った人とは実際の勤務開始前にもう一度会い、条件面の確

認と文書を取り交わすために1、2時間の話し合いを持つ。たとえ学生アルバイトであっても文書を交わすのは、後になって「言った・言わない」の論争を避けるためである。

そしてさらに1カ月間の体験勤務を取り入れている。これは仮採用以前のもので、実際に働いてみないと面接だけではお互いに人柄が分からないだろうということで作った制度である。1カ月勤務してみて、「こんな仕事をさせられるとは思わなかった」「院長やスタッフと相性が悪い」などの意見があれば、遠慮なく退職していただくことにしている。もちろん、この期間中は患者さんの治療は控えていただいている。いろいろな職場があるし、性格の不一致は必ずあるものだ。退職しても心を痛めないように配慮しているつもりだ。

ついでながら、千里堂治療院では「応募者登録制度」もある。小さな治療院なので、その時の募集ではたまたま縁に恵まれなくても、もし欠員等が生じた場合には優先的に連絡させていただくことを条件に、希望があればあらかじめ申し出ていただく制度である。

応募者側から「今すぐには転職できないが、現在の勤務に区切りがつく〇カ月後に採用してもらえないだろうか」という相談を受けることがある。このようなことを言う人というのは自分の行動に責任を持っている現れであり、それだけで患者さんを預けて安心だという証明になる。

私は、就職・採用というのはお見合いみたいなものだと考えている。「雇ってやる」「働いてやる」という発想では必ず問題が生じる。双方が人生の一時期、時間と空間を共有することにメリットを感じるからこそ就職・採用できるのである。相思相愛でなければ長続きしないのは当然である。

ところが、雇う側の院長先生が非常に気軽に採用する場合がある。「俺の言うことが聞けないなら辞めろ」という発想で雇っているのではないかと感じることもある。「院長がイヤなら辞めればよい」と前述したが、驚いたことに本当に人格を無視した言動をする院長先生、スタッフを怒鳴りつける先生は実在するのだ。「怒鳴る」というのはその時点で人間対人間の対等な関係を否定することである。その時点で雇用関係は解消され、別の主従関係に変化していると言ってもよい。

求人に関して苦勞した話を聞くたびに「この業界は前時代的な因習が残るイヤな世界だなあ」と感じることが多い。それは、文句も言わずに通ってくる患者さんに「先生」「先生」と

呼ばれ続け、祭り上げられる環境と無縁ではない、と言えないだろうか。少なからず残っている前時代的な徒弟関係も一因かも知れない。

治療法は治療家の数だけ存在する。だから、企業活動やスポーツとは異なり、自分の実力を見極めることが非常に難しい。こと治療に関しては一家言あっても、人間としては、患者さんもスタッフも学生アルバイトも弟子も、すべて平等なのだということを忘れないように自戒する毎日である。

当院では求人に対する院側の考えをホームページでも公開しています (<http://www.senrido.com/9/>)。

(〒182-0026 東京都調布市小島町1-34-4)